

# 芸術実践者のための研究方法論 I

—E・W・サイード, オリエンタリズム (ポストコロニアル理論) —

梅 田 力

星槎道都大学研究紀要

美術学部

創刊号

2020 年

# 芸術実践者のための研究方法論 I

—E・W・サイド, オリエンタリズム (ポストコロニアル理論) —

梅 田 力

キーワード：ポストコロニアル理論, E・サイド, オリエンタリズム, 研究方法論, 実践主導型研究, 抽象芸術

## 概要

本稿は、芸術実践者のための研究方法論集シリーズの第1回目。今回取り上げるのは、エドワード・W・サイドの著書「オリエンタリズム」を参考に、方法論「ポストコロニアル理論」を取り上げる。ポストコロニアル理論は、現在では様々な点が批判されながら大きく展開されているが、その嚆矢となったサイドの著書と主張は、ポストコロニアル理論の基礎として現在でも注目すべきものであろう。そこで、サイドの主張を考察し、芸術実践者である筆者自身の実践を例に、ポストコロニアル理論の方法論を考察する。芸術実践例として挙げるのは、西洋による抽象芸術の独占への批判である。

サイドは精緻なテキストの読解によって「オリエント (東洋)」という概念が、西洋によって作り出された人工物であったこと。また、オリエントは「語られる存在」であり続け、言葉を持たなかったことを暴き出した。さらに、この人工物の底流には非人間的、人種差別主義があり、それが数百年に渡り語られる中で、次第に組織化され、学問化され、やがて信頼すべき「知」となったことを暴きだした。

サイドの示した方法論から (西洋) 美術史を眺めると、抽象芸術が西洋で起こり—発展—衰退したと語られることに対し、なぜ西洋だけが抽象を発見する事ができ、それを批評し、そして終焉を言い渡せるのかといった問いが生まれる。この問いに関わる違和感を著者は芸術実践を通じて感じてきた。これは抽象芸術が西洋によって独占されており、そこには西洋だけが抽象を見つける事ができるというディスクリブルが存在しているのではないかと考えた。ここで示す例を参考に、芸術実践者が今後自身の制作や研究にポストコロニアル理論を方法論として使える手引きとなることを念頭に置いた。

## 1. はじめに

2019年5月に発足した東京大学芸術創造連携研究機構 (ACUT) を例に見るように、現在さまざまな分野の研究者が、芸術実践に注目し、研究や教育活動の中に積極的に取り入れることで、知を拡張しようとする取り組みが行われている。果たして、この取り組みは今後さらに発展し、芸術実践は伝統的な学問研究の位置を獲得し得るのか。また、獲得し得るとすれば、どのように位置付けられるのだろうか。

芸術を通じて「知の在り方」を問うことは、芸術分野だけでなく、既存の学問の在り方に揺さぶりをかけ、また様々に登場している新領域にヒントを与え、新たな社会を切り開いていくきっかけとなるのではないかと筆者は考えている。

その一方で、伝統的学問から手を差し伸べられ、芸術実践は利用されているにとどまっていることも、考えていかねばならない。芸術実践者は、活躍の場を与えられるのを待つばかりではなく、芸術実践の側からも伝統的学問に歩み寄り、時には主導権を持って芸術実践者だからこそ獲得し得る知を模索し、学術界に切り込んでいく挑戦的な姿勢が必要だと考える。

学問と芸術実践が交差している点で、多く議論があるのが、芸術実践者による博士号の学位取得問題である。*Share hand book for artistic research* で James Elkins の示した調査によると、日本はイギリスと共に世界的に見ても多くの大学機関が芸術実践者へ Studio Art PhD として、博士号の学位を出せる組織をもっており、2010年の段階では26の大学機関が博士号を出していることに驚きをもって報告している<sup>1</sup>。日本で芸術分野の博士

課程に関する調査は、東京芸術大学（以下芸大）が2008年にリサーチセンターを立ち上げ5年間にわたって行ったものが挙げられる。そこで芸大はこれまでに行ってきた研究が、近年欧米が注目している「Practice-based Research（芸術に基づく研究）」と多く共通していると述べており、それが芸大方式だとしている。この方式では、芸術実践（作品）が、研究の成果物であること。そして、論文の形式は例えばポエム的なものや、学術論文の書き方に縛られない、自由な形式のものも認めている。こうした取り組みは非常に興味深く、期待できる部分もあるが、この点には多く疑問も残る。この問題は、現在国際的にも多く議論されているものであるが、国際化が急速に進む中、果たしてどこまで「芸大方式」が世界で受け入れられていくか注目される。

筆者がこのような点に注目するきっかけとなったのは、英国留学がきっかけであった。英国では研究修士号（Master of Research in Creative Practices）という学位を取得したが、明らかに英国で学んだ事と、芸大方式の「研究」は大きく異なっている。英国の研究修士課程では、学術的な方法論や研究倫理を主に学んだ。研究修士号の学位取得者はPhDの1年目の免除対象とされる事があるため、ここから英国の博士課程のおおよその流れは見取れる。伝統的な学術研究を理解し、使いこなすには膨大な時間と労力がかかるが、今後様々な学術分野と対話し、利用されるだけでなく、主導権を持って芸術の可能性を広げていくためには、このような知識は必要であると考えている。

このように、学術的な研究の知識を深め、それを芸術実践の中に取り入れていくことで、新たな分野との積極的な交流の可能性が拓けてくると筆者は考えており、そのための第一歩としては方法論の研究が必要不可欠であると考えた事が、このシリーズを書く動機となった。

## 2. オリエンタリズムについて

### 参考図書について

芸術実践者のための研究方法論、第1回目となる本稿で取り上げるのは、エドワード・W・サイードの著書「オリエンタリズム」で示された方法論「ポストコロニアル理論」である。この著作が後のポストコロニアル理論の嚆矢となった事は一般に知られている。サイード

のオリエンタリズムは1978年に出版されると、大きな議論を巻き起こし、多くの国でも翻訳された。本稿執筆に際して使用したのは、1986年平凡社出版、今沢紀子翻訳（監修板垣雄三・杉田英明）の第9版（1994年）で、上記「オリエンタリズム」の原文翻訳に加え、サイードがその執筆後に受けた批判に対して返答した「オリエンタリズム再考」、杉田英明による「オリエンタリズムと私たち」、訳者あとがきがあり、これらも参考とした。

### 1) オリエンタリズムの概要

方法論を考えていく上で、まず本書全体を貫くサイードの主張を簡単に取り上げる。サイードの最も重要な主張は、オリエン（東洋）とは、西洋が作り出した「構築物」（サイード的に言えば仕立て上げられたもの）であること。そして、そのオリエン観には、西洋による帝国主義の支配、非人間的な不平等、人種差別が底流している。そして、政治性が文化や学術、一見政治とは無関係に見える、あるいはそう思われている様々な所に、実は大きな影響を与えているどころか、学術的な論拠（真実）として成り立ってしまっているという主張である。

さらに、西洋が東洋について語りえる一方で、東洋は語られるのみで、言葉を持たず、観察される対象でしかなく、言わなければならない指摘も注目すべきだと考える。そしてこれら西洋によって書かれた様々なテキストが、いつしか文化となり、学問となり、権威が生まれ、やがて真実となったと言うことである。サイードはこうして学問となり知識となったものを「オリエンタリズム」と名付けた<sup>2</sup>。

オリエンタリズムとは、オリエンを扱うための—オリエンについて何かを述べたり、オリエンに関する見解を権威づけたり、オリエンを描写したり、教授したり、またそこに植民したり、統治するための—同業組合的制度とみなす事ができる<sup>3</sup>

もう1つ注目すべき点は、西洋がオリエン（東洋）と言う「他者」を作ることで、かえって自分自身のアイデンティティーを作り出したと言う点である。オリエンは西洋で作られた人工の構築物であると同時に、その他者の構築物を作ることによって自分自身のイメージも作り出したという点も方法論的に注目される点である。

<sup>1</sup> ELKINS James, (ed) WILSON, Mick and RUITEN van Shelte, Share hand book for artistic research 2013, <http://www.sharenetwork.eu/resources/share-handbook>

<sup>2</sup> 監修者の杉田の見解も参考にしてている。

<sup>3</sup> エドワード・W・サイード、オリエンタリズム、4 p

## 2) フーコーのディスクール概念の援用

サイードの理論的支柱になったのが、フランスの哲学者、ミッシェル・フーコーの「ディスクール（言説）」という概念である。この概念は難解であり、単純に本稿では説明しきれぬものではないが<sup>4</sup>、サイードの言葉を借りれば全体像は見えてくる。少し長いが引用する。

私はミッシェル・フーコーの「知の考古学」および「監獄の誕生—監視と処罰」の中で説明されているディスクール概念の援用が、オリエンタリズムの本質を見極めるうえで有効だと言うことに思い至った。つまり言説（ディスクール）としてのオリエンタリズムを検討しない限り、啓蒙主義時代以降のヨーロッパ文化が、政治的・社会的・軍事的・イデオロギ的・科学的に、また想像力によって、オリエンタを管理したり、むしろオリエンタを生産することさえした場合の、その巨大な組織的規律＝訓練というものを理解することは不可能なのである。私の見るところでは、オリエンタリズムがそれほどまで権威ある地位を獲得した結果、人は誰でも、オリエンタについてもを書いたり考えたり行動したりするさいに、オリエンタリズムが思考と行動に加える制限を受け入れざるをえなかった<sup>5</sup>。

ミッシェル・フーコーは権力に注目し様々な考察を行った哲学者である。サイードが西洋の作り上げられた権力の解体を目指す上で、フーコーの理論と相性がよかったのは間違いない。サイードはいくつかの点で、フーコーとの相違点を主張しているが<sup>6</sup>、多くをフーコーのディスクールの概念に立脚している。

## 3) サイードの視点

ではなぜサイードがこのような鋭い視点を持ち得たのか。それは彼の出自と無関係ではない（また、これはオリエンタリズムで主張されている事とも同じである）。サイードは1935年にイギリスの委任統治化にあったパ

レスチナのエルサレムで生まれ、後にエジプト・カイロへ移りピクトリアカレッジで教育を受けた。その後、アメリカに渡りプリンストン大学・ハーバード両大学で学位を取得後、同国コロンビア大学で英文学・比較文学教授となり学究活動に入った<sup>7</sup>。本書でサイード自身も指摘している通り、政治性が思考に影響を与えており、それらは不可分のものであるという主張は、つまりサイードの出自が彼にポストコロニアルな視点を与えたと言うことと無関係ではないのである。

## 4) 批判の方法

次に、サイードは具体的にどのような方法を用いて批判をしていったのかを見る。サイードの肩書きは人文社会学者であると共に、文芸批評家とも称される。この肩書きからもわかる通り、サイードは様々なテキストを読解して、西洋によって数世紀に渡り築き上げられたオリエンタを批評・解体した。学術書に限らず、文学作品、政治関係のパンフレット、新聞雑誌の記述、旅行記、さらに宗教学や文献学の研究論文も含まれる<sup>8</sup>と本人は述べている。

この対象には実に多くの作家・政治家・学者が出てきており、ダンテやカール・マルクスといった、歴史的にも著名な作家たちも登場する。サイード曰く、「（鋭い眼差しで、資本主義の問題点を唱えた）マルクスでさ、このオリエンタリズムからは逃れられなかった」と述べている。

また、サイードはこれらのテキストの外在性に注目していることも重要な点である。これをサイードは「私が採用した方法論上の主要な概念装置は、戦略的位置選定と戦略的編成とも呼ぶべきものである。」<sup>9</sup>と述べ、テキストだけでなく、そのテキストがどういった場所で、どのような意味合いを持ち、あるいはどのように引用されたのか、に特に注目している。また著作同士がお互いに引用をしあっているという指摘も重要だ。

<sup>4</sup> 橋下は、テキスト・現実・個性性：E. サイードとポストコロニアリズムにおける文化研究の両義性において、一ポストコロニアリズムにおけるこうしたアプローチは、近年さまざまな批判にさらされている。というのも、言説分析は「さまざまな言説に先んじて独立して存在すると考えられた『実体』が、現実には言説によって構築されたものである」ことの暴露によってこそインパクトを生み出すことができたのだが、こうした前提はひるがえって「いかなる社会関係も、それゆえ抑圧や排除も言説と無縁ではなく、したがって言説の中で展開されるがゆえに言説の中で分析可能である」という含意を生じることとなるからである。—と述べている 橋下直人 唯物論研究ジャーナル <http://www.lib.kobe-u.ac.jp/repository/90003919.pdf>

<sup>5</sup> 4 p

<sup>6</sup> 23 p フーコーによれば、一般に個々のテキストやさしたる重要性はないという。しかし私は、これまでの経験からオリエンタリズムの場合には（おそらくこの場合に限って）そうではないと考えている。したがって、私はテキストを綿密に解説するという分析方法を用いて、個々のテキストまたは著者とその著者の属する複合的・集合的な編成とのあいだの弁証法的関係を明らかにしようとしている。とサイードは述べている。

<sup>7</sup> 373 p

<sup>8</sup> 23 p

<sup>9</sup> 20 p

### 5) 批判の対象設定とその理由

サイドが批判の対象として扱ったのは、主に18世紀以降のイギリス・フランス、そして戦後のアメリカのオリエンタリストであり、多少その他の国や時代、例えばダンテなどが登場するが、それは主張に必要な場合にのみで最小限にとどめられている。地域的限定の理由は、イギリス・フランスが帝国主義を主導で進め、世界の多くの場所を植民地としたという事実からである。そして戦後その役割を担ったアメリカが批判の対象となる。ここにドイツを入れるべきだったという批判があるようで、それに対しては、本書の冒頭でその理由が述べられている。

また、オリエン（東洋）は西洋以外の広大な地域を本来的には指すし、それについて調べることの重要性は語っているが、西洋に最も近く、歴史的にも関わり続けてきている中東・イスラム・アラブの文化に対する西洋のオリエンタリズムについて批判した。これはサイドの出自も関係しているだろうが、地理的に隣接し、歴史の中で常に西洋の最も身近な他者を演じさせられてきたイスラム・アラブあるいは中東に注目したためである。

以上、サイドは、東洋は西洋によって「作り出されたもの」であること事を主張し、その人工物は帝国主義的支配による政治性と深く結びついていること。そしてその根底には、非人間的な不平等と偏見があること。また西洋のみが東洋について語ることができる一方で、東洋は「語られる存在」であり続けたこと。そして、それらは西洋世界の中で連綿と受け継がれ、今では権威ある学問となり、真実と見紛うほどに組織化され、現在でも政治的・経済的・文化的に深い影響を及ぼしていることを主張した。サイドはこのような知識の成り立ちや、大前提となるものが歪んでいる可能性を、様々なテキストを調査対象として読み解いていった。サイドの方法論は、まず社会・政治と言ったものと思いが切り離せないこと、そして批判の特徴としてはその解体をしたことと言える。そして、彼が用いた方法論は、構造主義的であり、我々が大前提として疑わないもの、あるいは無意識に前提としていることに、疑いをかける場合、強烈な効力を発揮すると言えるだろう。

### 3. 実践例：西洋による抽象表現の独占とその批判

最後に自身の芸術実践を例に、どのようにサイドの方法論を使い、どのような研究アプローチの可能性があるか考察した。考察したのは、西洋による抽象表現の独占に関する批判である。

筆者の大きなテーマとして「抽象表現とは何であるか」という存在論的な問いがある。そして、制作を中心としながら、学術研究の面からもこの問いについて迫っていると考えている。この理由は、芸術実践者も意識的・無意識的、どちらにせよそれぞれの方法で研究を行っており、それを制作に取り入れているし、より学術的な方法で説明が出来れば、より多くの人に、制作活動について理解してもらえる可能性があるからである。

筆者の研究を例に挙げると、おおよそ造形の研究と、意味や理論的な研究の2つを行なっている。造形の研究は、自然の形を観察すること。また過去の芸術家の作品、伝統的模様、デザインをはじめ、華道、盆栽、庭園、ジュエリー、ファッション、建築等多岐にわたり、そういったもので使われている構成を研究する事で、造形力の向上に役立っている。

一方で、制作の中で気が付いたことや、沸き起こった疑問が、理論的にはどのように説明されているか、いくつかの著作にあたり学術的に確かめていくことで、より疑問が明瞭になったり、理論的に理解できたりする。そういった作業を重ねていく事で、新たな疑問が生まれ制作が深まっていくということがよくおこる。また、そうした成果を学術的な方法でまとめ発表していくことで、芸術実践者の思考を整理する機会となる。さらに、より多くの人に芸術実践の内容を説明出来ると言う利点もある。その点から考えていけば、学術研究も大きな芸術実践のプロセスとしての側面があると捉える事ができる。実際、今回のサイドのポストコロニアル理論について考察する中で、自分自身の違和感についても理解が進んだ。

では、次に筆者の芸術実践を使って、どのようにポストコロニアル理論の方法論から研究していく可能性があるかを見ていく。著者は芸術実践者としてこれまで20年近く、一貫していわゆる抽象彫刻・抽象絵画（非対象的表現）を制作し発表を続けてきた。これまで、英国への大学院留学を含め、様々な現代美術に触れる機会は少なくなかったように思うが、抽象表現への可能性を感じ続け、基本的にはそのスタイルを変更することなく、これまで一貫した制作を続けてきた。マンネリズムに陥ってしまったと感じたことは今のところ感じたことはない。

その一方で、制作を重ねるうちに、抽象という表現が、これまでの括りだけでは、言い切れるものではないと感じるところが出てきた。そのため、次第に抽象表現という言葉が、自身の制作を言い表す心地よい呼称ではなくなっており、今ではどこか違和感さえ残るように

なった。ここでは実際に研究するわけではなく、方法論にとどまっているが、それでも十分その可能性を示すことができると思う。

今回のサイードの著作を読み進めるにつれ、西洋で生まれ、発展したとされる抽象表現について再考し、自身の持っている抽象への違和感について考え、改めて発展の可能性を感じ、制作を深化させていく可能性を見出すことが出来た。サイードの方法論、特にフーコーのディスクール概念からの援用したものから考えると、文化・知識と言った一見、純粋に学術的な揺るぎない知が実は社会、そして権力と深く結びつき、その意味が生成に大きく影響されていくという主張は参考になった。以下、この点を踏まえてまず抽象芸術の歴史を見ていく。

### 1) 抽象芸術の定説

抽象表現は 1910 代に突如ヨーロッパで同時多発的に発生し、その後、戦時中にアメリカに渡ったヨーロッパの作家達が影響を与え、戦後アメリカで発達した。そして特にポロックらを筆頭に、アメリカ・オリジナルな絵画として「抽象表現主義」が登場した。抽象表現主義は、モダンアートを代表し、「世界中」で大きな影響力を持った。その後、抽象表現主義は、ポップアート等の登場により次第に衰退した、というのが「定説」であろう。

この定説を、サイードの示したポストコロニアル理論に則って見れば、その歴史を批判し、解体出来る可能性があることは明らかだろう。まず、サイードの批判した帝国支配とオリエンタリズムの歴史と、これまで定説として語られてきた抽象芸術の美術史は見事に一致する。そこにはオリエン（東洋）美術の流れが全くと言っていいほど登場しない。果たして、抽象表現は、西洋においてのみ生み出すことが出来る芸術で、また西洋のみがそれについて語る事が可能であり、さらにそれらは終焉の宣言をされるということが本当に可能であるのか。可能であれば、その根拠はどこにあるのか。サイードの批判を考えれば、これらを語るために西洋が施してきた、想像力から学術となり、やがて確固たる知の権威になり、真実の歴史となった経緯を、批判的に考察することが出来る。

さて、自身の制作の歴史を振り返ってみると、抽象表現を始めた頃は、ジョアン・ミロやデ・クーニングといっ

たまさしく西洋（ヨーロッパからアメリカ）の抽象的な表現をした作家に影響を受けた。また、アメリカで育ち、教育を受けた私の学部時代の恩師も、抽象の流れを汲んだ人物であった。そう考えれば、抽象表現主義の真似事から、私の制作がスタートしていることは否定できない。しかしながら、制作を続けるにつれ、次第にこれまでの語られてきた抽象が全てではないと考えるようになったことが挙げられる。

その大きな理由の 1 つに、日本の茶道に抽象的概念が多く含まれているという事実を実感したことが挙げられる。千利休と秀吉の間で繰り広げられた朝顔の物語。茶匠たちが愛した短歌。聚楽第にあったとされる利休好みの茶室「待庵」には、ミニマリズムの要素があるし、茶道具には様々な抽象的な美が見られる。そして、これらの美的感覚からの影響は、制作を始めた頃の西洋の作家と同じように大きな影響を受けてきた。

ここで言いたいことは、日本の抽象芸術の方が、西洋のそれよりも伝統があると言った愛国主義的な主張ではない（それはサイードがしなかったことであり、そうすることを否定している立場をとっている<sup>10</sup>）。それでも、少なくとも抽象表現が西洋で始まり、終わったとされる定説に関しては、解体の可能性があるという批判の目を向ける理由とはなるだろう。

批判の対象として、まず挙げられるのは、抽象表現主義の作家、そしてその表現を語り擁護した批評家クレメント・グリーンバーグをはじめとする彼らをスターへの上げた批評家やギャラリーの政治的・社会的・さらには学術的な立場と発言、それらが力を持ち得たシステム全体であろう。アメリカという国の世界的な状況も批判の対象となり得る。グリーンバーグはカール・マルクスのスーパー・ストラクチャー理論を用いていくつかの論文を書いているが、マルクス自体、サイードの批判の対象となっていることも注目すべき点である。またグリーンバーグが論文<sup>11</sup>で取り上げている詩人のフローベールは、オリエンタリストとして、サイードによって痛烈な批判を受けた小説家である。この点を考えても、グリーンバーグの構築した理論に、オリエンタリズム的な要素が含まれているかどうかを検討することは有意義であろうと考えられる。

次に、挙げられるのは、いわゆる抽象芸術の第一世代、

<sup>10</sup> オリエンタリズム再考 342 p

<sup>11</sup> グリーンバーグの書きたいいくつかの論文、例えば「モダニズムの起源」を見れば、グリーンバーグがフローベールに影響を受けている事が見て取れる。

抽象を生み出したとされるヨーロッパの作家たちについての批判である。モダンアートの特徴として、新しさは重要な意味を持つ。つまり、それらを創造し生み出した人々には大きな価値が生まれる。これらが生み出される背景にはどのような仕組みがあったのか、批判的に考察することは可能であろう。

例えば、抽象芸術を生み出した要因の1つとされるキュビズム。その代表的な作家の一人であるパブロ・ピカソは、「アヴィニョンの娘たち」でコンゴに住む部族の仮面彫刻を取り入れた。これらは「プリミティブアート（原始美術）」と呼ばれ、そこからインスピレーションを受けていると言われている。ピカソはこのアフリカの芸術をどのように目にし、語ったのだろうか。なぜ西洋にそう言った芸術を持ち込むことが出来たのか。またそうした芸術を取り入れて、アレンジしえたのは、西洋人で白人であったピカソである。なぜそれらはプリミティブと呼ばれ、取り入れられるべき立場となったのか。そして、ピカソはプリミティブアートをどう捉え、どのように語ったのか。批判の対象として考える事ができるだろう。

抽象芸術が歴史的に不動の定説を獲得した問題の根深さは、日本の美術シーンにも見て取ることが出来る。例えば、上で述べた「定説」は日本の中・高の教科書の美術の時間に使う教科書中では定説のものとして語られているし、日本国の芸術と比較しながら、あるいはそれよりも重要な伝統、あるいは揺るぎない美の基準として教えられる（教員の立場からは教える）。それらがまさに美術の歴史として、公共的に教えられている。さらに、「もの派」や「具体美術協会」等、日本のアバンギャルドな芸術動向は西洋によって語られることで「世界的」な評価を得た活動として今までの日本に伝えられ、日本が世界に誇る芸術活動の1つとして語られている。

サイドはこの点に関しては、大きく扱っていないが、オリエンタリズムは西洋にだけでなく、オリエン特の中にも非常に強い生命力を持って、真実となって語られている。これらは西洋の想像力によって描かれた、西洋にとって都合のいい人工物であるが、その人工物は「世界」のスタンダードであり、そこに認めてもらえなければ、世界的ではないというような学術的抑圧は、西洋から見れば極東オリエン特の日本人の至る所まで浸透しており、しかもその点について、疑問を持たずに現在も教育に取り入れられ、再生産され続けている。サイドの鋭い眼差しから生まれたオリエンタリズムの浸透は、このまま無批判にしておくべきではなく、改めて考え直していく必要がある。

## 2) ポストコロニアル理論による「絶対」の否定

上で示した通り、ポストコロニアル理論によって、西洋の抽象芸術の独占について大いに批判できる可能性を示した。しかし、その一方で、このポストコロニアル理論は諸刃の剣にもなりかねない。なぜなら、ポストコロニアル理論は、抽象表現が拠り所にしてきた「絶対性」あるいは「純粋性」を否定するためである。いくら純粋な構成をしていても、それらは必ず何らかの社会的、政治的な影響があると言う事。絶対的に抽象的な作品は存在しないということになる。著者が日本の茶道やその他の構成に影響を受けていることから、この姿勢は明らかである。筆者は以前、別のアプローチで芸術の絶対性について考察したが、その際も最終的には物理的な要因にぶつかり、完全に絶対的で芸術的なものは存在しないという結論に至った。抽象表現は、その性質的に純粋、あるいは絶対的な芸術を目指す、それはそうした方向へ「向かう」のみであって、哲学的には、決して辿り着くことはないと言う結論に至ることも踏まえておく必要がある。

## 3) 批評の方法

最後に、サイドが批判のために使ったテキストについても考えたい。サイドはあらゆるものがテキストになり得ると語った。これを美術の歴史の解体を前提に考えれば、文献はもちろんのこと、イメージ（作品）、それらが飾られるギャラリーの発信と、そのギャラリー（私営・公営含め）が美術界の中でどのような位置付けをされており、ディスクールが作られているかということ。批評家の言葉、マスメディアの報道も検討すべきテキストとなる。また、実践としては、芸術実践者が前提としている美についても、厳しい批判の眼差しで見つめると、オリエンタリズムが見えてくる可能性は十分にあり、それらも批判すべき「テキスト」として考える事ができるだろう。様々な現象の前提に疑いの目を向けると、至る所にオリエンタリズムは蔓延っており、それらを分析の対象にすれば、それらは意味のあるテキストとなる可能性がある。

以上、オリエンタリズムの概要、ポストコロニアル理論の方法論について、そして著者の芸術実践を例に、どのような研究があるか示し、最後にポストコロニアル理論を用いた場合の抽象表現の限界も示した。ここで著者が示した例はほんの一例であり、また歴史的視点からの研究の可能性のため、新しい研究の方向性ともいえない。当然、この方法論からもっと多様な研究が可能である。また、3-2) で示した通り、ポストコロニアル理論には、抽象芸術において特に重要な概念である、芸術の絶対性

や、純粋性といったものも否定される。それでも、ポストコロナル理論を制作に取り込むことで、終焉的扱いを受けている抽象表現の発展可能性を示すことは出来たと考えている。今後、本稿で示したポストコロナル理論を参考に、読者が研究を組み立て、自身の制作に活かしてもらえれば幸いである。

#### 参考文献

- エドワード・W. サイド オリエンタリズム 平凡社  
 Clement Greenburg, 藤枝晃雄 グリーンバーグ批評選  
 集 預草書房  
 ウヴェ・フリック著 小田博志監修 小田博志, 山本則  
 子, 春日常, 宮地尚子訳 新版質的研究入門—〈人間の  
 科学〉のための方法論 春秋社  
 Lechte John, Fifty Key Contemporary Thinkers  
 20世紀の美術 末永昭和監修 美術出版社  
 Wilson Mick and Ruiten Schelte van (ed), SHARE  
 Handbook for Artistic Research Education [http://  
 www.sharenetwork.eu/resources/share-handbook](http://www.sharenetwork.eu/resources/share-handbook)  
 Candy Linda, Edmonds Ernest, Practice-based  
 Research in the Creative Arts Foundation and  
 future from the front line, Leonard, Vol.51, The MIT  
 Press Journals, [https://www.mitpressjournals.  
 org/doi/pdfplus/10.1162/LEON\\_a\\_01471](https://www.mitpressjournals.org/doi/pdfplus/10.1162/LEON_a_01471)  
 東京藝術大学リサーチセンター成果報告 (2008-2012)  
<https://www.geidai.ac.jp/rc/>



# Methodology study for art practitioner 1

— Orientalism by E. W. Said (Postcolonialism) —

UMEDA Isao

## Abstract

This is methodology study series for art practitioner, part 1. This time, we are going to investigate methodology of *Orientalism* written by Edward. W. Said (Postcolonial theory). Nowadays, Although postcolonial theory has been diverged and discussed, Said's assertion through the book *Orientalism* still useful for understanding basic idea of postcolonial theory because of it has been seen as foundation of the theory. Hence, we are going to study his assertion and apply it to the art practice of author, who are art practitioner, for postcolonialism methodology as an example of application. As a sample of practical study is critique for the monopolization of abstract art by the "West"

Said disclosed through detailed reading the text that the concept of "Orient" is the artifact that made by the "West" and "Orient" had never had voices to speak themselves. Furthermore, the imagination of the West underlies inhumane racist ideology and it conveyed and talked repeatedly more than centuries, the artefact had become gradually organized, academicized, and then finally it became knowledge of the truth.

To see history of (Western) art from Said's point of view, it is suspicious that why abstract art created-developed — decayed in only the "West". It is also the question is generated that why only western can critique, find out, and sentenced the end for abstract art. Through the art practice, the author has felt discomfort that is similar reason to the question. So that we hypnotized the abstract art is monologized by the West and there is discourse that only the West can discuss and decide about what is abstract art. Overall, this study envisage a guide to represent how postcolonialtheory can be used for methodology for art practice.